

三島由紀夫「翼」論

——青年に託された告白——

石丸佳那

はじめに

「翼—ゴータイエ風の物語—」は昭和二十六年五月に「文学界」に発表された作品である。同年に連載を開始した「禁色・第一部」（「群像」昭和二十六年一月—十月）が、発表当時から注目を浴び、多くの論を集めてきたのに対し、「翼」に主眼を置いた言説はごくわずかで、十分な評価および研究がなされてきたとは言いがたい。

本稿では、「翼」における描写および構成を丁寧に検討し、本作品の重要性についての考察を示したい。「翼」は三島の死後、短編小説として複数の全集に取り上げられている。三島の生前は、次の三冊に収録されている。

① 「真夏の死」（昭和二十八年二月、創元社）

② 「三島由紀夫選集」第十巻 綾の鼓（昭和三十三年、新潮社）

③ 「真夏の死—自選短編集—」（昭和四十五年七月、新潮社）

三島は初出から収録にあたって書き換えなどは行っていない。特記すべき異同はないため、本稿では最後の収録本「真夏の死—自選短編集—」をテキストとして用いる。

一、「翼—ゴータイエ風の物語—」概要

「翼」は次のような話である。

従兄妹同士である杉男と葉子は、多摩川を見下ろす高台にある、お祖母様の隠居所で逢瀬を重ねた。

菊の匂いが漂う秋のある朝、二人は数年ぶりに、電車の中で再会する。背中あわせの二人は「一条の清浄な光線の温かみ」を感じ、「翼ではあるまいか」と思う。お互いに相手の背中に翼があることを感じるが、自分の背中に翼があるとは思い及ばない。相手が自分の翼の存在だけを信じていることなど知らないでいる。

杉男は葉子の翼を見たいといねがい、夢を見る。葉子の裸の肩に、翼を確かめることができるであろう、翌夏の海水浴に期待を寄せる。

昭和十八年の五月、太平洋戦争末期の夏は、杉男のねがいを叶えない。一週間後に、飛行場の勤労働員として東京を去ることが決まった杉男は、葉子とお祖母様の隠居所を訪ねる。杉男は葉子が居る湯殿の磨硝子ごしに「白い霧のやうなもの、幻の翼のやうなもの」を捉え、葉子の翼を見たと思う。それから一年ちかく、二人は手紙を書いて愛を誓い合った。

しかし、その翌年三月の空襲で、葉子は死ぬ。葉子の最期をきいた杉男は、自らも戦死することを待ち望む。しかし望みは達せられない。大学を卒業し、商社会社の堅実な勤め人となっ

た杉男は、小春日の朝、肩に「異様な重み」を感じるが、それが翼だとは気づかない。杉男の「何の役にも立たない巨きな翼」は「剥製の羽毛のように灰いろに汚れている。」春を迎えてなお、杉男は「怒れる不可視の翼」に、出世を妨げられていることに気づかないまま生きている。

(一) 自作解説と先行研究

三島は、作品「翼」について最晩年の昭和四十五年、「真夏の死」解説で、次のように述べている。

「翼」(一九五一年)「離宮の松」(一九五一年)「クロスワード・パズル」(一九五二年)は、短編小説のメチエの完成に努めてゐた私が、これら恰好な舞台に発表した作品群である。「翼」には「ゴートイエ風の物語」といふ副題がついてゐるが、ゴートイエの、リアリズムとははつきり袂を分つた短編小説を模しながら、実は、戦中戦後を生きのびなければならなくなつた青年の悲痛な体験を寓話的に語つたものである。私はこの種の短編で、むしろあらはな告白をし

かつた。「告白なんぞするものか」といふ面構へを売り物にしてゐた罰であらう。

「翼」に「あらはな告白」をしていたと語る以上、三島にとつて作品「翼」の執筆には意義があつたと思われる。しかし、はじめに述べたように「翼」はこれまで概括的に取り上げられることはあつても、個の作品としてはあまり論じられていない。作品を細部にわたつて検討し、その構成と主題にまで考察を進めた論は、池野美穂による「自作解説が語るもの」(『昭和文学研究』平成十七年九月、第四十九号、七十―八十二頁)の一篇にすぎない。

村松剛は「三島由紀夫の世界」(平成二年九月、新潮社)において、敗戦後数年間にあらわれる、「失恋の嘆きと自分を裏切つたものへの復讐とを主題としていた」作品群の一つに「翼」も含まれる²⁾とした。これを踏まえて安智史は、「三島由紀夫事典」(平成十二年十一月、勉誠出版)翼の項で、三島の自作解説にある「この種の短編」が「戦後一時期に書かれた三島自身をモデルとした青年の戦時下の恋愛(と失恋)を題材とした作品を指すと思われる」としている。

また、安はモチーフとしての翼が「芋菟と瑪耶」をはじめと

する他作品にも、「現世的なものからの飛翔の比喩表現」として登場していることを指摘しており、これをうけて池野は「三島由紀夫の翼」(『武蔵野女子大学大学院紀要』平成十三年、第一号)で「芋菟と瑪耶」におけるモチーフ翼の登場場面と「天人五衰」の場面をそれぞれ抽出し、そのイメージが三島の中で変わらない特別なモチーフであることを述べているが、その憧れの起源や意義についての考察はしておらず、確認以上のものではない。

しかし池野は前掲論文「自作解説が語るもの」において、杉男と電車で再会した日の英語の時間、葉子が読むという形で作中に登場するウィリアム・ブレイクの評伝について詳しく考察を進めている。葉子が読むブレイクの評伝は、天使を見たと言う少年ブレイクを「母が罰した」という内容である。この内容が、罰しようとする父を「母が止めた」とする、一般的なブレイクの評伝と異なることを指摘し、三島が「翼」に登場させたのはイエイツによる「ブレイク詩集」(入江直祐訳 昭和十八年八月、新潮)であることを明らかにしている³⁾。

また、作中ブレイクの評伝を読む場面は、葉子が「杉男と恋愛関係になりたいという気持ちを自らの中で確認するという手続き」であつたと述べ、「翼において重要なのは、罰せられるこ

とによって何かを信じる」構図であると考察する。

つまり、評伝の中で、母から打擲されるという罰をうけて、天使を見たと言ったブレイク。戦死するという罰をうけて、杉男の翼を信じた葉子。愛する恋人(葉子)を失うという罰をうけて、葉子の翼を信じた杉男、という関係がそれぞれ見出せることを指摘しているものと思われる。

池野は、杉男は三島モデルの青年であるという安の解釈に同意したうえで、「杉男は三島の分身である」とする。そして先に述べた「罰せられることによって何かを信じる」構図に三島自身を当てはめて「三島は、戦争によって、生きなければならぬ」という罰を受け、そのことによって自らに「翼」があると信じたのである」と考察し、これが三島の自作解説における「あらはな告白」の内実であると主張している。

しかし、この主張については疑問が残る。まず、池野のいうように三島が生き残るという罰をもって「自らの翼を信じた」杉男の分身であるとするならば、杉男も生き残ったことで、自らの翼を信じる結末を迎えねばなるまい。しかし杉男は戦後「異様な肩凝りに悩まされる」も、「もってゆき、もってかえる」だけの「徒らな労働」を繰り返すばかりで「こうも無駄なものほしげな努力を強いる何ものかの姿を見ない。」「杉男は自分の肩

にも翼があると葉子が信じていたことは夢にも知らない」ままである。生き残るという罰をうけて杉男が信じたのは、葉子の翼である。

池野は戦後の三島の言説から、当時の三島が「喪失感」と「挫折感」を味わっていたことを読み取り、「翼」執筆の動機を、三島が「自らの翼を信じ、書くことによって、それら(喪失感と挫折感)を乗り越えようとしていた」ことにあるとする。そして作品「翼」の意義も同様の立場から、「自分の翼を信じていた」三島が、「小説を書くことでその証明を試みた」点にあるといい、モチーフとして「翼」が重要なのは、「三島自身が自分の翼を信じていたからに他ならない」と繰り返す。

すべて三島が自分の翼を信じていたという見解に結び付ける池野論の「翼」執筆の意図、「あらはな告白」の内実、モチーフの捉え方は、筆者とはやや隔たりがある。果たして三島は、戦後生き残ったことで自分の翼を信じた、と告白しているのだろうか。三島が自分の翼を信じていたとすれば、それは戦後ではなく戦前ではなかったか。

三島は「小説家の休暇」(昭和三十年十一月、講談社)の中で、「私は恩寵を信じていて、むやみに二十歳で死ぬように思い込んでいた。二十歳を過ぎてからも、この考えがしばらく糸を

引いた。(中略)いよいよ生きなければならぬと決心したときの私の絶望と幻滅は、二十四歳の青年の、誰もが味わうようなものだった」と語っている。

戦死および夭折を飛翔とするならば、戦前の三島は自分に翼があると信じていた、といえるだろう。しかし三島は生き残った。戦死という「恩寵」、飛翔する機会は失われたのだ。戦前には、自分が夭折すると信じていたからこそ、戦後の三島は「絶望と幻滅」、即ち「喪失感」と「挫折感」に襲われるのである。

池野が指摘する「罰せられることによって何かを信じる」という構図に、三島を当てはめるとするならば、杉男が愛する恋人かつ従妹(葉子)を失うという罰をうけて、愛する葉子の翼を信じたように、三島は、愛する妹(美津子)を失うという罰をうけて、自分にはなく、愛する者にこそ飛翔の証を認めたとするべきではないだろうか。

愛する者は「自分の傍らから飛び去ってゆく」。戦後、もう戦死という飛翔の機会が永遠に失われたことを知っている三島は、絶望する。半ば絶望しながら飛翔を願い、半ば絶望しながら翼をもつ者を愛する。青年三島は畢竟、夭折していった者たちは、自分とは別種の存在なのだと感じたのではないだろうか。戦後の三島が認めたのは、翼ではなく、欠乏の自覚であろう。

ブレイクと三島の関係については、先に小林和子が「三島由紀夫の戦後短編に関する一考察―見捨てられた短編「人間喜劇」について」(『茨城女子短期大学紀要』平成十四年三月、二十九号)の中で「人間喜劇」冒頭に引用されているブレイクの詩や、「アポロの杯」に書かれたブレイクの「ソングス・オブ・イノセンス」を見た時の三島の感動ぶりや、川端康成「抒情歌」への賛辞としてブレイクの詩を引用していることなどから「三島がブレイクを肯定的にとらえていたことは間違いない」という見解を示している。

小林は戦後の三島が「ブレイク的な無垢で幸福な歓喜を信じることによって絶望の中から一筋の希望を見出そうとしているのではないか」と考察している。また「三島由紀夫事典」(昭和五十一年一月、明治書院)ブレイクの項で市川勇は、「ブレイクの幻覚に魅せられ、またそれに着想して、短編小説「翼」を書いた」と述べている。

小林と市川の指摘するように、三島がブレイクに惹かれていたことは明確な事実であろう。そして純粹性、天使的なものへの憧れとして、ブレイクの影響を「翼」に見ることも可能である。しかし、三島が翼をもつ者へ執着を示すのが本作品に始まったことではない以上、「翼」執筆の着想がブレイクによるとい

う市川の指摘については、一考を要する。翼に対する憧れの起源については後に詳しく述べるが、三島とブレイクの関係は、ブレイクの天使に魅せられて、三島が翼にあこがれを抱いたというより、むしろ三島が、元来抱いていた翼への憧れが、ブレイクの描く天使の翼と一致した、それ故にブレイクを好んだ、と考えるべきではないだろうか。副題の「ゴージェイエ風」をめぐる先行研究についても後述する。

(二) 成立 「禁色」創作ノートから

「翼」が執筆されたのは、「禁色」第一部の連載と同時期に当たる。「禁色」の「創作ノート」¹⁾には、「翼のあるやうな青年が、翼のあるやうな少女に恋す。青年は航空兵で死ぬ。少女は空襲で死ぬ。(有楽町空襲の時、最後に壕へ入りおくれた袖の短いセーラー服の少女、首ふつとびしのち、両の白き腕を翼のごとくバタバタさせたり)」と残されている。

まず「翼のあるやうな青年」は杉男、「翼のあるやうな少女」は葉子とそれぞれ符合する。そして「空襲の時、最後に壕へ入りおくれた袖の短いセーラー服の少女、首ふつとびしのち、両の白き腕を翼のごとくバタバタさせたり」という描写設定は、

作中で次のように語られる。

友人三人と、葉子一人はいつもの折目正しいスカートと半袖のセーラー服で、都心にちかい駅を出て来たとき、たまたま匆卒の警報が鳴った。友人三人はすぐさま近くの壕へとびこんだ。葉子は何故か遅れて迷っていた。友だちは壕にひびく爆音のなかから葉子の名を呼んだ。ようやく姿をあらわした彼女が、もう誰一人のこっていない明るい閑散な街路を横切って、まっすぐに壕へとびこもうとしたとき、あと二十米ばかりのところ爆弾の衝撃を後ろからうけた。

葉子の首は裏われていた。首のない少女は地にひざまづいたまま、ふしぎな力に支えられて倒れなかった。ただ双の白い腕を、何度か翼のようにはげしく上下に羽搏たかせた。

ほぼそのまま劇的な葉子の最期として作中に用いられていることがわかる。以上のことからこれは「翼」の原案と見て間違いないだろうが、ここで二点の差異を指摘しておきたい。まず一点目、少女の死の日付について。少女の死がノートの段階で

は「有楽町空襲の時」とされている。作中では葉子の死が「翌年の三月の空襲」とされる点を指摘しておきたい。

次に二点目、青年の死について。ノートの段階では、青年も航空兵として戦死する設定となっている。一方「翼」に登場する杉男は、戦死を望みながらも生きたまま戦後を迎える存在である。この変更点は「翼」の構成および主題を読み解く上で重要だと考える。

本稿では、先行研究では論じられてこなかった「メチエの完成に努めてみた」という三島の言葉を取り返し、その「メチエの完成」、技巧がどこに見られるのか、「翼」における描写、構成から検討したい。そして、三島の「あらはな告白」が、作中においてどのようになされているのか、原案ノートからの変更点である、生き残る青年像に着目しながら考察していきたい。まずは「翼」の構成要素の一つである副題の意図から検討する。

(三) 副題テオフィル・ゴージェ

副題にその名があるテオフィル・ゴージェについて三島は、「美について」(『近代文学』昭和二十四年十月)や「唯一主義と日本」(『読売新聞』昭和二十六年十一月十九日)、「小説家の休

暇」(昭和三十年十一月、講談社)、「実感的スポーツ論」(『読売新聞』昭和三十九年十月五日)、「をわりの美学」(『女性自身』昭和四十一年二月〜八月)などの中で度々言及している。

なお「定本三島由紀夫書誌」によると三島は「或る夜のクレオパトラ」(昭和二十三年五月三十日、斉藤書店)を所蔵していたことがわかっている。収録作は以下の七点である。括弧書きはタイトル表記の訳が異なるものを記す。

- ① 或る夜のクレオパトラ
- ② 鴛の巣(ナイチンゲールの巣)
- ③ アルリア・マルケルラ(ボンベイ夜話)
- ④ 詛いの星をいたたく騎士(双つ星の騎士)
- ⑤ 夢の中の恋(死霊の恋)
- ⑥ オンファール
- ⑦ パンの靴をはいた子供

安智史は、ゴージェ作品の設定に注目して、前掲「三島由紀夫辞典」翼の項で次のように指摘する。

ゴージェはしばしば、この世ならぬ美女と恋におち、最

後には一人現世に引き戻される青年の物語を描く。本作は、死の輝きに満ちた世界（戦中）を二人の愛の世界とし、その世界が恋人ともども消滅した後も、なおかつ失われた世界にこそふさわしい「怒れる不可視の翼」を負ったまま生き続ける青年の物語にアレンジしたと言える。

ゴージェイエの小説には、処女作の「コーヒー沸かし」をはじめ、「夢の中の恋（死霊の恋）」「アルリア・マルケルラ（ボンベイ夜話）」「スピリット」など、多くの作品で、生きている男のもとに、美しい女の死霊が現れ、男は死の世界に焦がれるという展開が描かれている。確かにこれらのゴージェイエ作品は、安のいう「この世ならぬ美女」と恋した青年の物語といえる。しかし、ゴージェイエ作品と同様の設定をもつ、という構成上の性格からゴージェイエ風と題しているとする指摘には疑問が生じる。たとえば先に挙げた三島の所有した『或る夜のクレオパトラ』の③「アルリア・マルケルラ（ボンベイ夜話）」では、青年の愛により古代ボンベイの死せる美女は、時を超えて甦える存在である。そして⑤「夢の中の恋（死霊の恋）」でも、青年の口づけにより息を吹き返すクラリモンドが描かれている。もしゴージェイエ作品に共通する設定に做ったものであるならば、葉子は死

せる美女として登場し、杉男の愛で復活する場面があるほうが自然に思える。葉子の容姿についても、作中では「十人並よりちょっと上というところ」とされており、絶世の美女ではない。

一方、池野美穂は前掲「自作解説が語るもの」の中で、三島が川端康成に宛てた書簡（昭和二十一年三月三日）をとりあげ、三島の「ゴージェイエに対する批判的な心情が読み取れる」と指摘し、その批判は、「芸術至上主義」を掲げることが、「却って芸術、或いは美の可能性を狭めてしまう」ことにあるとしている。そしてその批判的にみていたゴージェイエを副題とした理由を、翻訳者・田辺貞之助によるゴージェイエ作品の評価に求めている。田辺貞之助の言葉を「死霊の恋・ボンベイ夜話」（昭和五十七年二月、岩波）の「あとがき」より引用する。

愛と美を基調とし、たとえ主人公が死に終わる場合でも、美しい愛に殉じた死である。「ボードレルが「ゴージェイエの小説は美と死から成る。美と死は彼の真髄である」といったとどこかで読んだことがあるが、以上のことを諷したのであろう。

池野は詳しく言及していないが、田辺の言葉をふまえて「愛

と美」、「美と死」をテーマとしている点にゴッティエ風の理由があるだろうとしている。

まず、三島がゴッティエに対して批判的であったという指摘から見直していきたい。谷崎潤一郎の「金色の死」を論じるにあたって三島はゴッティエの名を挙げ次のように述べている。

かつて私は谷崎氏を「絵画的天才」と評したことがあるが、造形美術の世界ならいとも自然な理念を、大胆にも文学の世界へ持ち込んで、この青年時の固定観念を一生を通じて発展させた作家は、世界にその類を見ず、他にはわずかにテオフィル・ゴッティエを数えるのみである。

谷崎を絵画的天才としたうえで、ゴッティエを称賛しているように思われる。また、「芸術のための芸術」についても、「この標語をあてはめるには、ワイルドやゴッティエの作品よりも、敬虔なジャンセンスト、ジャン・ラシーヌの作品のほうが、より適切」としており、三島がゴッティエ風とする所以を、芸術至上主義者としてのゴッティエに結びつける必要性はないと考えられる。

また、「美について私が日頃考えていることの断片的なノート

である。」と冒頭に記された「美について」の中で、「ゴッティエの美の観念。視覚の優先。」と記しており、断片的ではあるが、三島のゴッティエに対する考えを読み取ることができる。「レアリスムとは、はつきり袂を分かつた短編小説」とする以上、美化や理想化を避けて事実をありのままに表現するレアリスム、写実主義とは立場を異とすることになる。そして、美化や理想化を厭わない、ゴッティエ的な「視覚の優先」を指したといえるのではないだろうか。

「ゴッティエ風」という副題は、やはりゴッティエの絵画的と言われる文体に倣い、絵画性を意識した視覚の優先により、戦時下に間近で見た「死の耀やかしさ」を描写している点を指すものだと考える。副題の意図を文体面での模倣、メチエの試みと解釈したうえで、作中の構成、描写について詳しくみていきたい。

二、「翼」にみる青年・三島の投影

(一) 風景描写と時間軸

作品「翼」には、太平洋戦時下における三島の体験や記憶、

哲学や告白が技巧的にちりばめられている。舞台設定一つをみてもそれは明らかで、地名や年号など、空間の指標となる固有名詞は一度ずつしか明言されないのに、描写的かつ視覚的に空間は限定されていく。

まず場所について、杉男と葉子が過ごしたお祖母様の隠居所は「多摩川を見下ろす高台の中腹」と最初に示される。これは現在の東京都大田区北西部に位置する、多摩川台地の田園調布にあたるのではないかと思われる。「多摩川」という地名は、この一度きりで、後は「東京」としか語れないが、三島の筆はその舞台を活写し、視覚的に印象付けていく。以下多摩川を示す言葉に傍点を付しながら、場所についての描写を抽出してみる。

このあたりは都心よりも空襲に対する危険がよほど少なかった
ので、建物の疎開も行われず、住人達も疎開をいそいで
はいなかった。防空壕は面白半分に掘られていた。

涼亭は折から満開の躑躅に囲まれていた。白がある。洋
紅がある。紋り模様がある。物音のたえた涼亭の石畳には
躑躅の低い硬質の影が映り、蜂の羽音だけが、眠っている

午後の時の寝息のようにきこえている。そこにいると到底
戦争の最中とは思われない。

雲はひろい眺望のあなたに、鳶尾の花のように巻いては
ほぐれていた。対岸の緑をぬきん出て、空中観覧車の黄い
ろい椅子が、何か天から降りて来て坐る人を待ちあぐねて
いるように、ふしぎな様子で空中に懸っている。戦争がは
げしくなるにつれ、その遊園地のさまざまな機械は電力
制限のために運転を罷めたのである。まことによく晴れた
日で、空の青さは限りもなかった。東京の空がそれほど青
く、星空があれほど澄明であったのは、生産不振によって
都会の煤煙が減少を見たからであるが、そればかりではな
く、戦争末期の自然の美しさには、死者の精霊たちの見え
ざる助力がはたらいていたのではないかと思われる。ふしが
あった。

「この遊園地」というのは、当時空中観覧車のあった多摩川園を
示しているとみてよいだろう。これらの戦争末期の細部にわた
る風景描写には、三島の記憶が読み取れる。色彩表現豊かに「死
の耀やかしさ」が表現されている。戦時下の理想化、美化を厭

わない「ゴートイエ風」な視覚優位の描写が用いられているといえるのではないだろうか。

口述筆記の「わが思春期」(「明星」昭和三十二年一月〜九月)で三島は当時見た風景を「何もかも見おさめだ」という気がしていました」と語る。

「もう負けるにきまっているこの戦争は、おそらく日本国民の全滅をもって終わるだろうし、目の前にあるものは惨憺たる破局だけ、要するに死だけでありました。ですから何を見るにも見おさめという気がしたし、ある楽しみを味わっても最後の味だとおもうのでした。ですから感覚は生き生きとし、つまらない事物にも、それを見ることに喜びを感じ、ちょうど雨季に入りかけた木々のしたたりも、実に新鮮に目に映るのでした。」

この当時の心理は、杉男が東京を去る一週間前、「笑いのあとには毀れやすい硝子のような沈黙が残った。二人はこの沈黙が何であるかを知っていた」という場面に投じられているのではないだろうか。二人はその風景が「見おさめ」だと感じていたし、笑いあえるときに「最後の味」だと知っていたのだらう。

先に抽出した「雲はひろい眺望のかなたに」にはじまる一文も、「戦争中の夜空がネオン・サインでよこされていなかったために、月や星がどんなに美しく見えたかを、私は思い出す」という三島の記憶の反映である。

また、場所の描写と同様に時間軸についても三島のメチエが光る。作中の時が明言されるのは、「昭和十八年の初夏」の一度きりであるのに、この情報から「翼」における時系列が巧妙に知らされる。

杉男と葉子が電車の中で再会を果たした日は、最初「ある朝」 「秋であった。」「この日」と曖昧に表現される。しかし「来年の夏になれば」という杉男の思いが、「昭和十八年の初夏」の場面で果たされていないことから、二人の再会は昭和十七年秋の朝だったことが導かれる。そして「昭和十八年の初夏」が「五月の午後」であり、二人の過ごす時代が「戦争末期」であることが追加されていく。

「それから一年近く」二人は誓い合う。当然「昭和十八年の初夏」五月から一年近くの昭和十九年の間だとわかる。そしてその「翌年の三月の空襲」で葉子が死ぬ。この空襲が昭和二十年三月のいわゆる「東京大空襲」を指すのは明らかである。

三島はこのように場所と時間の指標となる文字列を有効に登

場させることで、「翼」に空間的秩序を成立させ、作品に自らの戦争体験を投影しているといえる。次にその三島の青年時代および戦争体験には、二つの愛があったことについて述べたい。

(二) 失われた二つの愛

杉男は葉子の伯父の息子である。すなはち従兄である。云いかえれば、彼は恋人と兄とを生まれながらに兼ねそなえることのできる位置にあった。

この一文に反映されているのは、兄妹を甘美なものとして捉える三島特有の価値観である。三島は敗戦の約二ヶ月後の十月に、チフスで妹・美津子をなくしている。昭和三十年八月に発表した「終末感からの出発―昭和二十年の自画像」の中で、当時の思いを「日本の敗戦は、私にとつて、あんまり痛恨事ではなかった。それよりも数ヶ月後、妹が急死した事件のほうが、よほど痛恨事である。私は妹を愛してゐた。ふしぎなくらゐ愛してゐた」と語る。この「ふしぎなくらゐ愛してゐた」妹の死、という一つ目の事件を悲嘆する三島に、その数ヶ月後、二つ目の事件が起きる。

「戦争中交際してゐた一女性と、許嫁の間柄となるべきところを、私の逡巡から、彼女は間もなく、他家の妻になつた。」失恋である。三島は「妹の死と、この女性の結婚と、二つの事件が、私の以後の文学的情熱を推進する力になつたやうに思われる」と語る。

この太平洋戦争のとき青年・三島をおそつた二つの事件、失われた二つの愛が、作品「翼」に影を落として指摘したい。

これ（葉子の最期）をきいた杉男の悲嘆は甚だしかった。彼は戦争が自分を殺してくれるのを待った。しかしみんなが生きているように、今も彼は生きている。

従妹の葉子を失い、生きたまま戦後を迎える杉男の悲嘆が、妹の美津子を失つた三島の悲嘆と重ねられたものであることは明らかだろう。

そしてもう一つの愛であつた恋人との体験も作中に投影されている。

愛し合っている二人は、ひっきりなしに手紙をやりとり

した。従兄同士は愛を誓い、未来を誓った。正直のところ、かれらは誓ってばかりでいたのである。この不安な世界と時間の広がり、二人の無垢な誓いの言葉で埋めてしまえば、煉瓦を一つ一つ漆喰で固めるように、いつか住むにたのしい強固な家が築かれるような気がしたのである。二人にはほかに力とてなかつたので、あらゆる不安にむかつて言葉をなげつけた。滅ぼされてゆく恋人たちが呪文を投げつけるように、この甲斐ない誓いの呪力を信じようとしたのである。

戦中手紙を書きあう杉男と葉子は、青年三島とその恋人の映し絵である。「わが思春期」のなかで三島は「夢中で恋文を書いていた」と語り、「私にとって彼女の手紙が生活の唯一の色どりであった」と振り返る。作中の「正直のところ、かれらは誓ってばかりでいたのである」という表現は、「いやらしいことは、お互いに一つも書かず、今読んだらどんなにかわいらしい恋文であろうかと思えます」と当時を揶揄する三島の皮肉である。作中で杉男と葉子の誓いを「甲斐ない誓い」とするのは、誓い合つたはずの「彼女は間もなく、他家の妻」となつて「自分の傍らから飛び去ってゆくこと」を、青年・三島が体験した

からではあるまいか。

この失われた二つの愛の影が、次に詳しく述べる「風流線」という装置にも意味をもたせていると考へる。

三、メタファーとしての「風流線」

杉男が東京を去る前、お祖母様の隠居所の場面の描写を引用してみる。

お祖母様はちょうど午睡からお目ざめになった。枕許には初版本の鏡花の小説が伏せてある。木版の芙蓉の大輪の美しい装幀である。

三島が、鏡花好きの祖母の病床に置いてあつた多くの「初版本の鏡花の小説」を手に取り親しんでいたことは、いくつかの対談やエッセイ等⁹⁾で語られている。

美麗な装幀で知られる鏡花本の中でも、「芙蓉の大輪の美しい装幀」という表現が最も相応しいのは、『続風流線』（明治三十八年八月、春陽堂）ではないだろうか。表紙は木版多色刷りの鮮やかな芙蓉、口絵は鯖崎英朋の代表作として扱われる水中

の男女である。三島が、鏡花本の内容を意図せずに作中へ用いたとは到底思えない。この場面で、数ある鏡花本の中から「続風流線」を選び、登場させたこの構成には三島の告白が潜んでいるのではないだろうか。その内容から探ってみたい。

「続風流線」は明治三十六年十月から翌三十七年三月にわたって「国民新聞」に掲載された「風流線」の続編として、明治三十七年五月より十月まで掲載された。日露戦争の影響を受け、連載を中断しつつも完成を迎えた長編小説である。正統併せてひとつの作品として扱われる。

作品の舞台は石川県、手取川流域の鞍ヶ嶽におかれる。北陸線の鉄道工事にあたる工夫たち「風流組」は「正に色黒く、丈長き異様の怪物」、「のたくり込んで来た毒蛇」と形容されるような悪評の集団である。

一方、湖上の城には、表向きには博愛を掲げ、生き神「如来様」として崇められている慈善実業家の巨山五太夫とその妻・美樹子が住んでいた。この巨山の別荘は「賞美して申す名」を「芙蓉館」といい、美樹子はいわゆる芙蓉の顔とかさねて「芙蓉夫人」とよばれる類なき「美人」である。なお「続風流線」の表紙を飾る芙蓉の花は、作中において「芙蓉の花の、湖一輪、朝は醒めたる高士の如く、夕は酔へる美人に似たり」など印象

的な描写でもって紹介される。

悪の風流組・工夫たちと、善の博愛・巨山という対立関係は、巨山の偽善と悪が暴かれていくなかで、悪の巨山、悪と戦う風流組、という立ち位置に転じていく。この悪と戦う風流組を率いるのは、かつて美樹子と想いを通わせた過去をもつ青年工学士・水上規矩夫と、その旧友の青年・村岡不二太、村岡の恋人・小松原龍子である。

村岡不二太は、明治三十六年五月二十二日、華敵の滝で投身自殺をはかった第一高等学校の青年・藤村操をモデルにした青年であるという指摘が定説化している。「村」岡「不二」太という名前も藤村に由来するものと思われる。

「風流線」および「続風流線」の登場人物は多いが、本稿では藤村操、村岡不二太、水上規矩夫、そして杉男という四人の青年に焦点を絞り、青年・三島と比較することで「翼」における「続風流線」の意義をみていきたい。

(一) 青年・藤村操と村岡不二太

悠々たる哉天壤。遑々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからむとす。ホレーシヨの哲学竟に何等のオーソリチ

―を価するものぞ。万有の真相は唯だ一言にして悉す。曰く、「不可解」。我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る。既に巖頭に立つに及んで、胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲観は大なる樂觀に一致するを。

〔巖頭之感〕明治三十六年五月二十二日

右の遺書、いわゆる「人生不可解」の言葉で広く知られる「巖頭之感」を遺した十八歳の若き青年の死は、世間に大きな波紋をよんだ。黒岩涙香は事件後間もなく「少年哲学者を弔す」（『万朝報』明治三十六年五月二十七日）のなかで「我が国に哲学者無し、此の少年に於て初めて哲学者を見る、否、哲学者無きに非ず、哲学の為に抵死するもの無きにけり」として藤村の死を哲学のための死として取り上げている。

藤村の死は、その遺書の内容から、哲学の為の「抵死」とみなされ、哲学的な青年たちがこれに倣って投身する「後追い自殺」が続出した。安倍能成をはじめ衝撃を受けた者たちによる追悼文が寄せられた。安倍は「『巖頭之感』をめぐって」（『新潮』昭和二十四年九月）のなかで藤村の死について、日露戦争における青年の「人生問題に対する関心」を代表する「時代的意義」をもった死であったと述べている。

一方で、藤村が投身したとされる五月二十二日から、七月三日に至るまで四十二日もの間、遺体が発見されなかったことから、藤村は生きていたのではないかとする藤村生存説など、様々な藤村像が飛び交ったという¹³⁾。

またその死の真相についても、「失恋臚物語」（『読売新聞』明治三十六年七月七日）をはじめその翌日の「北国新聞」、またその翌の「東奥日報」（明治三十六年七月九日）などいくつかの所見においては、藤村の死が、哲学的苦悩による厭世ではなく、文部大臣菊池男爵令嬢に恋敗れた喪失体験に起因するのではあるまいか、という藤村失恋説も取沙汰されていた。姉崎正治も「清見潟の一夏」（『太陽』明治三十六年十月一日）で「藤村操の死が失恋の為なりしとて、彼の死を讒誣せんとする者新聞に見ゆ、世は失恋の人を憐れまぬまでに酷薄となりけるよ」と述べており、藤村を「失恋の人」として扱う説が広まっていたことがわかる。この失恋の人、藤村の真偽は、のち昭和六十一年七月二日「朝日新聞」において、藤村が想い人・馬場千代宛てに送った書簡や、滝口入道への書入れ本から、その失恋が明らかになったと報じられることになる。

このような後に判明する真偽の事情はさておき、作中における村岡は、当時の藤村の生存説と失恋説に擬えた設定をもって

らがこの理想の青年には、なりたくてもなりきれず、「臆病」から自殺することもできなかつたという。

三島の理想の青年像のうち、前者の勇敢な信条のための死というのは、杉男が待望した戦死にあたるだろう。そして、後者の憂鬱な世界苦ゆえの自殺というのは、村岡が意図した哲学的殉死にあたるのではないだろうか。「風流線」の村岡は、哲学的殉死を装うだけで、「現在生きて居る」。「翼」の杉男は、戦死を待望するだけで、「今も彼は生きて居る」。この二人の青年にみるのは「臆病」から自殺することもできなかつた」という三島の告白と言えるのではないだろうか。「勇気があるなら、僕はもう彼の時に、事実華厳の滝で死んだんだ」という村岡の台詞は、杉男ないし三島の代弁といえる。

事件からあしかけ三年、生き延びた村岡は「ものをいっても亡骸同様、動いても幽霊同然、二度と世のなかへ名告つて出られる身体でない」自分は形骸だけの存在となつてしまつたと語る。これに同調するように三島は、前章に述べた「終末感からの出発―昭和二十年の自画像」で妹と恋人の失われた二つの愛を事件として語つたのち、「種々の事情からして、私は私の人生に見切りをつけた。その後の数年の、私の生活の荒涼たる空白感は、今思ひ出しても、ゾツとせずにはゐられない。年齢的に

最も澁刺としてゐた筈の、昭和二十一年から二・三年の間といふもの、私は最も死の近くにゐた」と続ける。自身の生活を「死骸の日々」とよぶ三島は、村岡そのものである。

「断念める事は出来んのです。固より未練で、臆病で、あらためて、死を事実には為し得ない、死ぬには死なれず、生きたれもせず、苦行を盡して解脱はならず、懊悩に懊悩、煩悶に煩悶をかさねた結果、今、龍さんがお聞きだつた、其の最後の決心が出来たんです。」

〔風流線〕鞍ヶ岳 九十七頁五行〜八行

言わば三島の代弁者、村岡青年は、妨げられた恋をあきらめようとするも、断ち切れない心を「解脱なんぞ思ひも寄らない」「貴女を求めます」といい、龍子に「一つの決心」を告げる。

僕は迷に迷をかさねた結果、思ひ切つて悪魔、外道になつたのです。村岡は死ぬに死なれず、活きるにも活きられず、横にも縦にも身を置くに處なく、煩悶に煩悶して、死しても到底、解脱を得、慰安を求むることが出来ないから、

活きながら悪魔になるのだ。

あらゆる罪を犯す、為し得る限り不法を働く。悪逆、無道、酷薄、残忍、人を殺す、」

〔風流線〕鞍ヶ岳 一〇二頁一行～五行)

この村岡の「決心」なる理屈を受けて籠子が確認する。

「待つて下さい、それでは、むづかしい理屈は分かりませんが、けれども、何、詰りかうですか。貴下は生きちや居られない、死ぬにも死なれないから、心でなり、仕事でなり、良くないことをして、悪人になる。」

然うすると、悪人は滅びなければならぬから、天なり、命あり、神、佛、人なり、何にせよ、其の悪人を滅すものは屹と、善人、人でなければ、神、佛ですから、其処で、頼んで、成佛をしたいといふのね。」

〔風流線〕鞍ヶ岳 一〇四頁七行～一二行)

要するに村岡は、自分では、死ぬことも生きることでもできないから、淘汰されるために悪になる、というのである。そして村岡はこの理屈から、旧友の規矩夫とともに悪名高い「風流組」を率いる首領となるのである。その旧友の規矩夫もまた、三島

と類似する青年である。規矩夫についてみていきたい。

(三) 青年・水上規矩夫

規矩夫は鉄道工事にあたる「風流組」の青年工学士である。投身自殺を果たしたはずの村岡が、規矩夫のもとに現れた場面⁽¹⁾で、規矩夫は「村岡、生きて居たか、村岡、貴様死な、かつたか」と声をかけ、沈黙する村岡に「死な、かつたな、馬、馬鹿な奴だ、頼もしくない奴だ、羨ましくない奴だ」という言葉を浴びせる。そして自分が美樹子に失恋したという「秘密」を、覚えて居るか続ける。

「をい、僕の秘密と、貴様の秘密を、お互いに知つて居るのは、世に唯二人ばかりだといふことを覚えて居るか。覚えて居らんか。僕の秘密といふのは、知つて居やう、堅川^{（堅川）}の娘の事だ、美樹子の事だ、巨山夫人の事だ、」
工学士は溜息を吐いて、

「意中の人の事だ、欺かれた事だ、不叶恋の事だ。僕が迷つた事だ、迷の覚めない事だ、断念^{（断念）}られない事だ、如何ともし難い事だ、他人の女房の事だ、人の媽^{（か）}の事だ、恐るべ

き事だ、罰せられるべき事だ、誅せられるべき事だ。」

〔風流線〕邂逅 一七六頁八行―一七七頁一行

規矩夫は、自分が知らぬ間に、想い人であつた美樹子を失つた青年として登場するのである。想いを通わせた美樹子は巨山と結婚してしまつた。三島もまた、先に述べたように自分の知らぬ間に、想い人が「他家の妻になつた」失恋体験をもつ。青年・村岡に次いで、ここに青年・規矩夫という第二の代弁者が生まれる。失われた二つ目の愛を嘆じる青年・三島が浮かび上がつてくるのである。規矩夫は言い連ねる。

「が、貴様の秘密といふのは、華厳の滝の事だ、いや、其の遺書かきぞとの事だ、其、其処に居るを龍さんの事だ。

貴様が、華厳の滝で死んだと聞いた、僕は信じたよ、其の死を信じたよ、けれども哲学のために殉ずるといふ、其の遺書は疑つた、何、断じて信じなかつた、世を欺くと思つた、虚名を売ると思つた、可加減なことをと思つた、卑怯な奴だと思つた、未練な奴だと思つた、悟られない人間だと思つた、浮かばれない亡者だと思つた、馬鹿な奴だと思つた、不埒な怪しからん、途方もない奴だと思つた。

何故なら、僕はお龍さんの事を、其の秘密を知つて居たから……けれども、

〔風流線〕邂逅 一七七頁二行―九行

龍子への恋に苛まれていたという村岡の「秘密」を知る規矩夫は、村岡の哲学的な遺書を嘘だと思つたという。「けれども敢て疑はなかつた、遺書は虚にもしろ、死んだのは事実と信じて、僕は羨ましかつた、実にあやかりたかつたぞ、村岡」と述べる。

同一死ぬならば、僕が死ぬのだ、僕が活きちや居らん筈だ、貴様の方は、唯女との仲を妨げられたといふに過ぎない、其でも死ぬのに。

僕は何うか、思ふ人は既に他に結縁かたづいて了つて居る、村岡、独身の水上規矩夫みなづみが悶ゆればといつて、泣けばといつて、怨めばといつて、憤ればといつて、巨山夫人美樹子を何うする、万事休矣、もし生きて堪へられんければ死あるのみだ。

けれども僕は死なんのだ、いや、死得ないのだ、死ねないから死んだ貴様が羨しかつた。あ、羨しい、たとひ遺書はいつはりにもしろ、身を投げたのは真である、最後の際に

世を欺く、卑怯な見得をした事は、共に齡すべからずであるけれども、一死万罪を償ふに足る、其も可、羨しい。(中略)君が羨しくつて、羨しくつて、常に自ら押抑へて居る、自殺の望がむら／＼と起つて居たのだ。」

〔風流線〕選返 一七七頁十三行―一七九頁十行

規矩夫の「思ふ人は既に他に結縁してしまつて居る」し、規矩夫は「死得ない」。「僕が死ぬのだ、僕が活さちや居らん筈だ」という叫びは、三島のそれと重なる。

(四)「翼」と「風流線」

三島は「翼」の作中で、作品名を直接挙げるのではなく、その美麗なる装飾の描写をもつて「風流線」「統風流線」の存在を仄めかず。実に技巧的といえる。「風流線」には日露戦争下において、恋愛に絶望した村岡・水上青年たちが描かれ、「翼」には太平洋戦争下において、愛する葉子を失つた青年杉男が描かれる。「統風流線」は、生きたまま戦後を迎えてしまった青年が、どのような存在となつていくのか、青年たちの心情と杉男および三島を同一化させるメタファーとして受け止めることができ

るのでないだろうか。

「創作ノート」にみられる「翼」の原案では、「有楽町空襲のとき」と示されている葉子の最期が、作中では「翌年の三月の空襲」に変更されている点について、先に指摘した。

奥住喜重、早乙女勝元『東京を爆撃せよ―作戦任務報告書は語る』(平成三年、三省堂)によると、有楽町および銀座地区が標的となつて空襲に見舞われたのは、昭和二十年の一月二十七日である。中島飛行機製作所へ向かつていた七十六機のうち五十六機が有楽町・銀座地区へ目標を変更し、有楽町駅は遺体であふれたという。

「有楽町の空襲」でなくなったという構想を採用するならば、翌年の「一月の空襲」とするほうが自然である。なぜ敢えて三月としたのか。単純に、三月十日のいわゆる「東京大空襲」こそが、死者数十万人以上の最大の空襲である故に、変更したのだろうか。

戦前の日本において三月十日は陸軍記念日だった。これは明治三十八年「日露戦争」で大日本帝国陸軍が勝利をおさめ、奉天城に入城を果たした日に由来する。三島はここで日露戦争を背景とした「風流線」および「統風流線」の世界と、太平洋戦争下の「翼」の世界を意図的に繋いだのではないだろうか。

四、「翼」の意義

(一) 翼への憧憬 青年・倭建命

先行研究のブレイクについて述べた際、翼への執着がはやくから三島にあったことを指摘した。最後にその根拠を述べておきたい。

三島は少年時代から、倭建命の白鳥伝説を題材とした「青垣山の物語」に着手している。未発表作である「青垣山の物語」は昭和十七年二月に起筆し、推敲を続けたとされる。三島が抱いていた、飛翔および翼をもつ者への憧憬は、「古事記」の英雄、倭建命にはじまるのではないだろうか。

七十二年に成立したとされる「古事記」は、現存する日本最古の史書である。中巻によれば倭建命は景行天皇を父とする。八十人の御子のうち、有力な皇位継承権をもつ三人の太子のうち一人であった。幼名を小碓命、あるいは倭男具那王という。彼はその勇猛さゆえに、景行天皇から危険視される。景行天皇は、倭建命が英雄的な桁外れな資質をもつ故に、自らの皇位を脅かす存在と見做したのである。景行天皇は義賊の征討を理由に、彼を都から遠ざけ続ける。一種の追放である。

まず倭建命は熊曾（熊襲）建の征伐を命じられ九州に赴く。小碓命は美しい「童女之姿」に扮し熊曾建を魅了する。そして宴が盛り上がりをみせたとき、刀で熊曾建を殺してみせる。この征伐時より小碓命は大和国の勇敢な者として、「倭建命」という御名・称号を得る。英雄・倭建命の誕生である。

征討という名目で命じられるままに東奔西走した倭建命は、終には山の神の怒りを買ひ、足を病む。足が重くなるのに耐えて、能煩野（伊勢国鈴鹿郡）にたどり着く。倭建命は「吾心恒念自虚翔行」（吾が心恒に虚より翔り行かむ）とする。望郷のなか足が動かなくなつた倭建命は、命尽きる。「於是化八尋白智鳥翔天而向浜飛行」（是に八尋の白ち鳥と化り天に翔りて浜に向ひて飛び行きき）。

「青垣山の物語」には、この場面、倭建命が帰郷のねがい叶わず途中で命尽き、白い翼をひろげて飛び去るまでの顛末が描かれている。「青垣山の物語」という題は、倭建命の思国歌の一節に「阿衰加岐夜麻菴母禮流」¹⁵（青垣山隠れる）とあることによるのだろう。「古事記」には、夭折する英雄の悲劇、そして飛翔の器官としての翼がある。三島の翼への憧憬の起源をここに求めることができるのではないだろうか。

(二)「翼」に込めた「告白」

自作解説において「わたしはこの種の短篇で、むしろあらはな告白をしてゐた」という三島は結局のところ本作品で何を告白していたのか、改めてまとめておきたい。

三島は「魔―現代的状況の象徴的構図」(「新潮」昭和三十六年七月)の中で「若い不平たらたらなサラリーマンの心には、社長になりたいという欲求と紙一重に、若いままの自分の英雄的な死のイメージが揺曳している。」「かつては戦争がそれ(英雄的な死)を可能にした」と述べている。杉男の翼は、死の可能性が満ちた戦中では「真白なきらきら光る」ものだった。しかし終戦を迎え、「英雄的な死」の機会、飛翔し得る時を永遠に失ったその翼は「血に濡れそぼち」赤く染まることもない。杉男は「戦後という死の可能性が片鱗だに見当たらぬ社会」で、「剥製の羽毛のように灰いろに汚れた翼」を持って余す青年として描かれる。飛翔できず無様に生き残った青年・杉男には、欺瞞的な告白を重ねた三島の、生涯を通しての英雄的な死への憧れと、その根底にある矮小たる自分への劣等感が窺える。

三島は「空白の役割」で次の如く記している。

私には、悲劇的な勇敢さや、挫折をものともせぬ突進の意欲や、幻滅をおそれぬ情熱や、時代と共に生き時代と共に死のうとする心意気や、そういうものがまるきり欠けていることを告白する。

この告白は、本作における「あらはな告白」と共通するものであると考える。戦後の新たな時代・生活を受け入れ邁進する国民として生きることができず、甘んじて生を手放せず。「翼」は「時代と共に生き時代と共に死のうとする心意気」の欠如した存在でありながら、自分の「英雄的な死のイメージ」を捨てきれずにいた三島の心情が、青年を通して吐露された作品である。

終わりに

以上、三島由紀夫「翼―ゴートイエ風の物語―」を考察してきた。

短篇小説「翼」が「文学界」に発表されたのは昭和二十六年五月。描かれているのは昭和十七年の秋から昭和二十年三月十日の東京大空襲、そして戦後である。「翼」は「戦争が自分を殺

してくれるのを待った」にも関わらず生き残った三島の心情が青年に託されている、告白作品といえる。また、「翼」同様殆ど言及されることのなかった短編小説、「急停車」（中央公論）昭和二十八年六月）には、杉男のその後と思しき「杉雄」が登場する。二十八歳の好田杉雄は昭和二十二年に東京大学法学部を卒業後、商社に就職したが、戦首される。「一寸ばかり芸術的」な職につく杉雄は、周辺の死を感じながら、生きていくことの実に満ちた戦争時代の懐旧に没る。戦時下は中島飛行機小泉工場、高座海軍工廠に勤労働員されていたという設定であり、戦争という非日常に焦がれる杉雄の来歴は、杉男ないし三島と一致する。改めて「この種の短編」に光をあてた研究が必要であろう。

三島は、場所と時の指標を組み込むことによって、「翼」の空間的秩序を生み出し、ゴースティエ風なる絵画的、視覚の優位をもって戦時下の死を美しく描写する。そして「風流線」の青年の体験および心情に自らの青年期を重ね、戦争とともに失われた二つの愛を潜ませている。終戦とともに三島は、理想としていた青年像に決して自分がなり得ぬことを知った。翼を引きずりながら生きる杉男に「誰か翼を脱ぐすべを教えてやる者はいないのか？」と締めくくる三島は、これら「メチエの完成」に

努めながら、飛翔を夢見た青年が現代に生きることの喜劇的な困難を「告白」していたといえるのではないだろうか。

〔注〕

(1) 『三島由紀夫全集』第六卷（昭和四十八年九月、新潮社）、『三島由紀夫全集』補卷一（昭和五十一年、新潮社）、『三島由紀夫短編全集』下巻（昭和六十二年十一月、新潮社）、『決定版 三島由紀夫全集』第十八巻 短編小説（平成十四年五月、新潮社）に収録されている。

(2) 村松剛『三島由紀夫の世界』（平成二年九月、新潮社）一七頁

「敗戦後何年かの三島の作品は、『盗賊』だけでなくその多くが、失恋への嘆きと自分を裏切ったものへの復讐とを主題としていた。『恋と別離と』がそうであり、『接吻』『伝説』『白鳥』『哲学』の掌編四部作がそうであり（中略）『翼』も、同じ範疇に入る」としている。

(3) イエイツの評伝には「夏日蕪に居坐するエゼキルの姿を見、走つて母に告げしに、妄語なりとて打たれたりとの伝あり。」という記述がある。

(4) 『決定版 三島由紀夫全集』第三巻「禁色」創作ノート（平

成十二年二月、新潮社)

(5) 『定本三島由紀夫書誌』(昭和四十七年一月、蓋微十字社)

(6) 『川端康成・三島由紀夫 往復書簡』(平成九年十二月、新潮社)

(7) 『解説』『新潮日本文学 谷崎潤一郎集』第六卷(昭和四十五年四月、新潮社)

(8) 『唯美主義と日本』(『読売新聞』昭和二十六年十一月十九日)

(9) 『ラディゲに憑かれてー私の読書遍歴』(『日本読書新聞』昭和三十一年二月二十日)や澁澤龍彦との対談「鏡花の魅力」

澁澤龍彦「三島由紀夫おほえがき」(昭和五十八年十二月、立

風書房)で述べている。

(10) 『風流線』第十九、五十八頁

(11) 『解説』種村季弘「泉鏡花集成」第十一卷(平成九年四月、筑摩)

(12) 安倍能成「恋愛と自殺について」(昭和三十三年三月)「華

厳滝の大迫吊会」(『読売新聞』明治四十年八月二十五日)に

よれば藤村の後追い自殺者の統計は未遂併せて百八十五名(明治三十六年四十二名、三十七年二十三名、三十八年三十一

名、三十九年三十六名、四十年五十三名)にのぼったとさ

れる。

(13) 高橋新太郎「巖頭之感」の波紋」(『文学』昭和六十一年八月号、十一〜十九頁)

(14) 『風流線』第五十 一七六頁

(15) 「夜麻登波 久爾能麻本呂婆 多多那豆久阿袁加岐 夜麻登母禮流 夜麻登志宇流波斯」(倭は 国のまほろば たなづく青

垣 山隠)もれる倭しうるはし)

なお、古事記の引用は「日本古典文学大系」第一卷 古事記祝詞(昭和三十三年六月、岩波)による。

(参考文献)

荻原浅男「悲劇的英雄倭建命」(『国文学解釈と鑑賞』昭和二十年

九年八月、十九卷八号、五十五〜五十八頁)

金沢公子「テオフィル・ゴーチエの幻想小説の世界」(『成城法

学教養論集』昭和五十六年二月、二号三〜四十五頁)

笠原伸夫「『風流線』の地形図」(『文学』昭和五十九年、五十二

卷八号、九十九〜一〇三頁)

秋山稔「『風流線』の一考察」(『三田國文』昭和六十年十月、四

号、四十〜四十七頁)

六月、三十巻七号)

上田正行「風流線」の背景」(「金沢大学文学部論集」昭和六十

二年七号、一〜四十三頁)

谷川渥「三島由紀夫の美学講座」(平成十二年一月、ちくま文

庫)

三島由紀夫「文学的的人生論」(平成十六年十一月、光文社)

森宗崇「『F』ゴーチエに関する年譜的研究 若きフランスたち

(承前)」「(「東亜大学紀要」平成十七年十一月、九〜二十一頁)

「決定版 三島由紀夫全集」全四十二巻・補巻一卷・別巻一卷(平

成十七年完結、新潮社)

山口基「三島由紀夫研究文献総覧」(平成二十一年、出版ニュー

ス社)

「嵯崎英朋(麗しき鏡花本の世界)」(「別冊太陽」平成二十二年

三月、一六七号)

島山篤「倭建命の熊曾征討物語の生成」(「弘前学院大語文」平

成二十三年三月、三十七号、七〜二十八頁)

末村晴代「煩悶自殺する青年の登場 藤村操『巖頭之感』に關す

る報道と小説について」(「国語国文学研究」平成二十五年七

月一四三号、四十九〜六十五頁)

小林弘子「泉鏡花「風流線」論―社会通念への強烈な批判と恋

愛至上―」(「群系」平成二十五年七月、三十一号、七〜十一
頁)

(いしまる かな/伊丹市立天王寺川中学校教諭)